
空からの贈り物

くえいさ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空からの贈り物

【Nコード】

N7540A

【作者名】

くえいさゝ

【あらすじ】

空からふってきた魔女っ娘のコメディーです！見ていてね

第1話：空から落ちてきた核弾頭（前書き）

初作品です！まだ文章力が足りない私ですが暖かい目で見てください
い

第1話：空から落ちてきた核弾頭

「やつべ〜。すっかり遅くなっちゃった!」

ただ今、バイトからの帰り道を全力で走っております!
今日中にDVDを返さないと延滞になっちゃう。

え?何を借りたかって?

……それを聴いたらおしめえよ、あんちゃん!

でもこんな時に限って残業させるなんて…。

……これはきつと陰謀だ!

俺は バイトくんだから別にこき使ってもいいよね〜 という思想
の人間の陰謀に填まってしまったのだ!

……はあ…少し疲れたから歩こう。

「夜風が気持ちいい〜」

布団があれば寝ちまいそうだ。

ふと夜空を見上げる。

街灯が少ないから星達がより一層輝いて見えた。
その中の一つがピカピカ光っていた。

「何だあ? UFOかあ?」

あ、また光った。

さっきよりも大きい。

「なんか段々近づいているような気が…。ま、いつか」

俺はまた歩きだした。

家まであと角一つの所まで来た時、さっきの輝きが気になってまた顔を夜空に向けた。

輝きはまた一段と大きくなっていた。っていうか目視で分かるくらいに確実に近づいている。

「もしかしてこっちに近づいてきてる？」

そう気付いた時には既に

「ゴゴゴゴ…」

と飛行機の離陸の時みたいな轟音が鳴っていた。

「もしかしてマジン！？マ アンなのか！？」

それから俺は全力で逃げた！逃げに逃げた！自宅のアパートなんかもう通り過ぎてるよ！

「何なんだよ！今日は厄日か！？」

と俺は石に躓いてゴロゴロガッシャーと派手に倒けてしまった。

「イテテ…。ちくしょー！こんな時に…。さっ、さっきの星は！？」

上空を見上げると既に目の前まで来ていた！

「ソロモンよ！私は帰ってきた！」

ゴスッ！

「ヌルオツ！」

俺は下腹部に核弾頭をぶち込まれ、薄れゆく意識の中で《骨董屋何かしてないのに…》と心の中で呟いた。

第2話：まほゝのくにいゝからやって来た

悪夢だ…。

空から突然降ってきた核弾頭。

南極条約で禁止されたんじゃないの？

ってか、何で南極なの？

「……さん」

DVD返しそびれで俺、死んじまうのか？

「…宏…さん」

誰が延滞料払うんだろ…。

「孝宏さん、起きてくださーい」

もう、お先真っ暗だ。

「天誅!!」

ドスっ！

「ふっっ！」

ようやく目が覚めた俺。

ここは……俺の部屋？

「やっと目を覚ましましたね？」

……この娘、誰？

髪の毛はピンクで腰の辺りまである。

瞳は黒で見つめると深い深い闇へ引きずり込まれそうだ。
肌は逆に白。いや、純白のほうがしっくりくるだろう。

「孝宏さん、大丈夫ですかあ？」

「……きみ誰？どうして俺の名前知ってるの？」

当然だよな。

見ず知らずの娘に名前を知られているってどういう事？

見た感じと言うか、ピンク色の髪をした悪趣味な女なんてバイト先にも友達にも親戚にもいない。

「平山孝宏さん。年齢は22歳。大学4年生でアルバイトをしている。彼女いない暦と年齢は同数。間違いないですか？」

ストーカー！？こいつストーカーなのか！？

俺のプロフィールを全国の皆さんに晒しやがって！

「てめえ誰だ！場合によっては出るとこ出て」

「口を慎め小僧！」

バキッ！

「あう……」

右フックを顔面に食らいました…。

「それはそうと…先程は失礼致しました…」

打って変わって今度は申し訳なさそうな顔をした。
しかも瞳を潤ませながら上目使いで…。

これで妹属性が付いていたら即攻でガバーと行くんだろうが、残念ながら俺にはそんな属性はない。

どちらかと言えばチアリーダー属性だ！

と、話が反れてしまった。

「さつき？何かあったっけ？」

思い当たる節はあるようなないような…。

「すみません。急いで下界に来たものですから…。スピードを出しすぎて、コントロールが出来ずに孝宏さんにぶつかってしまいました」

下界？何言ってんだ？ぶつかっただって…

「あー！お前もしかしてさっきの核弾頭」

「こんな可愛い娘を捕まえて誰が核弾頭じゃ、コラア！」

怖え…。

つてかコロコロと感情変わり過ぎだ。

「つてか、あんた誰？名前は？」

「人に名前を聴く前に自分から名乗るのが礼儀ではなくて？」

お前はどこのお偉いさんの令嬢だよ。

それにさつき俺の名前とかもろもろをお前が全国ネットで晒したじやねーか。

……ま、逆らうと怖そうだから素直に従っとくか。

「俺は平山孝宏だ」

「はい。知ってます」

おちよくつとるのか貴様。

「私はソフィア。魔法界ニルヴァーナから修業のために来ました。これからよろしくお願いしますね」

この人はあれだ。頭がパーなんだ。魔法とか言ってるし。

ここはファンタジー世界じゃねーぞ！

とここでさっきソフィアが言った言葉に疑問をもった。

「よろしく願いしますってどういう事？」

「あなたは言葉の意味も分からないのですか？だから彼女も出来ないんですね。哀れな人間だこと」

カッチーン！

「あー！それを言っちゃうんだ！せつかく一部屋貸してあげようと思ったのに。気分が変わった。出てけ！」

「そ、そんな…。私には孝宏さんしか頼れる人がいないんですよ」

再び瞳を潤ませて上目使いを取る。

でも俺には利かないもんね！

「知るかそんな事！それに何で俺なんだ？他のヤツの所へ行けばいいだろ！」

ガチャ

「うだうだ言わないで素直に

「はい」

って言ったほうが長生き出来ますよ？」

「ふ…ふあい！」

言ったよ！言ったから口にガトリング突っ込むの止めて！裂けちゃう！…！

こうしてかなり脅迫気味に自称魔法の国からやってきたサリー……
基、ソフィアが同居することとなった…。
ハア…。

「あ、そうそう。孝宏さん」

「な…に…」

「えっちなのはいけないと思います！」
バキッ！

「あゝあゝ！レンタルDVDが！」

後日、割られたレンタルDVDを弁償しました…。

第3話：キャンパスライフ

朝。

目覚めを促すように小鳥の囀りが響き、

カーテンの隙間から朝日が差し込み、俺の顔を照らす。

清々しい。

いつもならそう思えるんだけど…。

「孝宏さん。朝ですよ？」

こいつのせいで俺の平々凡々とした日常が非日常に変わってしまった…。

こいつはソフィアと言う昨日脅迫気味に（と言うか、完全に脅迫だけど…）

居候になった変人女だ。

自称魔法使いらしいが、冗談はその髪の毛ぐらいにして欲しいものだ。

「今日の講義は昼からだ。まだ時間があるから寝る」
ジャキッ

「ぐだぐだ言わずに起きましよう。講義とやらに行く前に死んじやいますよ？」

「分かった！分かったからガトリングを向けないで！」

まったく…。こいつと一緒だと命がいくつあっても足りないよ。

「朝ごはん作つたので食べてくださいね」

朝飯…。これがか？

ちなみにメニューは
味噌汁にご飯。

ここまではいい。日本人のスタンダードな食事だ。
問題なのは、>肉厚のステーキ。
重い。重すぎる。

「ごめんけど、ちょっと
「たーんと召し上げれ」

俺は再びガトリングを突きつけられながら朝飯を完食した。
い、胃が凭れる…。
それにしても…。

「何で銃器なんか持つてるんだ？それにここじゃ銃刀法違反で捕ま
るぞ？」

「心配御無用！捕まえる前に殲滅しますので それにこれがあった
方が魔力を使わずに済みますし」

とソフィアは持っていたガトリングを頬擦りしている。
…普通に怖いよ。あんた。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、こっちでは魔法を使わないよ
うに！」

「えゝ？何ですかあ？」
「あたりまえでしょう！魔法なんてクレイジーなモノが有るなんて
知れたら、研究所に送られてあゝんなことやこゝんなことをされち
やうぞ！？」

やらしい手つきでソフィアに迫る。

「エッチなのはいけないと思いますー!」

「はい。すいません。私が悪うございました。」

だからガトリングを寸止めで回すの止めてくれますか?」

…一応、分かってくれたみたいだ。

昼。

俺はキャンパス内にいた。

大学は光学系の大学で俺はソフトウェア学科を選考している。

ソフィアはというと、家で待機するように命を賭けて懇願した。

あいつがいると何をしでかすか分からないからな…。

「今日の講義どうだったよ?」

俺の友人、正人が話しかけてきた。

襟足は長めの茶髪男だ。

女の子にはそこそこ人気があるらしく、よく話し掛けられているのを見かける。

「あゝ、ダメだね。殆どが講師の自慢話になってた」

「だろうねゝ。あのハゲチャビンの講義はいつも自分の武勇伝になっちゃうからね」

「ドブ川すくってドリンクバーとか言ってた」

「オリ ジのネタじゃん」

そんな他愛の無い話をしていると女の子が近づいてきた。

「あ…あの…」

黒のセミロングを両端で束ねている。

眼は少し垂れ下がりのどこにでもいる普通の女の子だ。
少し控えめな態度は俺の好みだけど、こういう状況の場合、正人目
当てだろう。

「ん？どうしたの？」

と、いつもの様に正人が対応する。

「あ、いえ。そちらの方にお話が…」
「え？俺？」

意外だった。

正人もそんな顔をしている。

自慢じゃないけど、この大学にに来て話し掛けられたのは正人以来
初めてだ。

「あ、あの…これ読んでください！」

女の子から四つ折にされた一枚の紙切れを渡された。
こ、これってまさか！

女の子は顔を赤らめながら走って俺達から離れていった。

「おいおい！これってラブレターじゃね！？」
「か、かもね」

すこし緊張気味に四つ折にされた紙を開く。

『開いてます！』

紙にはそう一言だけ書いてあった。

何の事？

「お、おい…」

正人がおずおずと話しかける。

「何？」

「『開いている』ぞ」

「何が？」

「…社会の窓。しかも全開」

「な、何い！？うわホントだよ！！」

慌てて閉める。

俺、恥っ…。

少し精神的にグロッキーになっていると聴き慣れた声が聞えた。

「孝宏さん！お弁当忘れてますよ〜？」

…来やがったか。規格外女め…。家で待ってろって言ったはずなのに。

わざと置いていった弁当を持ってきやがって…。

でも、わざと忘れたなんか言ったらたぶんガトリングを蜂の巣にされるんだろうな…。

「ゴメンゴメン！あり」

後ろを振り向いた俺は目を疑った。

エプロンを着、三角巾を着けたソフィアは掃除機に乗ってフワフワと上空からやって来たからだ。

「掃除機に乗ってフワフワ来るんじゃねーよ！普通、箒とかだろうが！」

「ってか、魔法使うなって言っただろーが！」

「お、おい。ヒロ…この人…誰？」

正人が隣にいる事を思い出した！

正人はというと、わなわなと肩を震わせている。

や、やべえ…。

「ま、マサ。これは何と言うか…。その…」

「可愛い…」

「さ、最近掃除機で空飛ぶのがブームなんだよ！……って。え？」

…コイツの目ん玉は腐れ外道ですか？

「落ちてマサ！よく見るコイツのどこが可愛いんだ！？髪ピンクだぞ？掃除機で浮いてるんだぞ？」

「それでも俺は構わない！お嬢さん俺と付き合って！」

「話し掛けるな。下郎が」

ひ、ひでえ…。

マサの奴、凄んごく凹んでるし…。

「あ、孝宏さん。はいお弁当！今度忘れたら…（ジャキッ）…ね」「は、はい！有り難く食べさせて頂きますでございますー！」

怖ええよ…。

「お、お前も災難だな……」

「分かってくれるか……。我が友よ……」

居候が来て二日目にして俺は居候に全ての実権を奪われました……。

「ところで、弁当って何が入ってるんだ？」

「飯と、……味噌汁と肉厚のステーキ……」

第4話：電車サバイバル（前書き）

このネタ…分かる方は多いかと…

第4話：電車サバイバル

皆さんこんにちは平山孝宏です。

ガタンゴトン…

今、電車に乗ってます。
事の発端は数時間前…。

「ねえ〜！」

「んあ？」

「これ何ですか？」

ソフィアはテレビを指している。

テレビには電車が映っていた。

この区間をグルッと一周している山田線だ。

料金が安い上に主要都市に手軽に行けるので利用者は多い。

「これに乗りたいですう！」

「え〜…」

「乗りたい！乗りたい！乗らせる！！」

「行こうか」

命が惜しいしね…。

…でもこの電車、裏の顔があるんだよね…。

「わあ〜…」

ソフィアは目を爛々と輝かせ座席に正座した形で窓の外を覗いている。

見た目、俺と同年の女の子が少年少女のような姿ではしゃいでいるのは正直恥しい…。

「ソフィア、お願いだから普通に座ってくれ…。

どうしても外を見たいんならドアの前に立ってろ」

「嫌」

即答ですか…。

俺たちが電車に乗って5駅目、俄かに周りが殺気立つ。それを察知したかのように車内放送が流れた。

「まもなくうゝ、肋原ゝ。アバラバラゝ。あばらバラバラみたいな？（笑）

ケフンっ！降り口は左側です」

な、何？この車掌…。

「尚、次の停車駅にてチャレンジクイズを行いますので10分少々停車いたします。

問題は電車がホームに進入次第出題いたします。

正解されました車両から扉を開きます。

今回は早押し、×クイズとなっております。皆様ゝ、頑張ってください」

…出たか。裏の顔…。

この電車 というか路線はたまにこんなふざけた事をやってくる。それが通勤ラッシュの時も平気でやってくるから、遅刻者が多数出

てくる。

一部の人間には受けがいらしいけど…。

「面白そうですね！やりましょう！」

一部の人間。

「問題：都市伝説で有名な『口裂け女』。ある言葉を三回言えば助かると言われています。」

その言葉とは何でしょう。答えが分かりましたお客様は、お近くのインターホンにてお答えください」

この問題もおかしいだろ。昭和の匂いがプンプンするぞ…。
と、ここでメガネをかけた賢そうな男がインターホンに手をかけた。

「こんな問題簡単ですよ！答えは　です！」

「はい、不正解です。『同情するなら金をくれ』と言っても、くれるわけ無いでしょ。」

馬鹿ですかあなたは」

がつくり頂垂れるメガネの男。

すんごい言われ様だな…。

結局、5両目に乗っていた客が正解した。

「それでは最終問題　×です。問題：私は25歳である。　だと思
う方は1～5両目に、

×だと思う方は6～10両目に移動してください」

分かるわけねーじゃん…。

そんな事を思っていると電車内で大移動が始まった。

母とはぐれ泣きじゃくる子供。

あまりの窮屈さにガトリングを連射する女。

……ガトリングを連射する女！？

「ソフィア！それは置いてこいって言っただろう！」

「身の安全を守るためには必要不可欠です！」

そうこうしている内に移動時間が終了してしまった。

結局移動出来ず終いだっとな。

ちなみに今まで1両目にいました。

「正解は……です！」

おおお！

正解した！

ドアがぷしゅ〜と開き、俺たちはいそいそとプラットホームを後にする。

はあ…疲れた…。

さてこれからどうしようか。

「私、あのおっきな建物に入りたいです！」

ソフィアが指差した先には大手家電量販店が建っていた。

まあ、そろそろ新しい炊飯器も欲しかったし行くか。

俺たちは量販店へと足を伸ばした。

第5話 アンソニー

皆さんどうも。平山です。

今、ソフィアと一緒に家電量販店に来ています。

最近、暑くなりましたね。

外に出ると太陽の直射日光に熱風のビル風、アスファルトからの照り返しがキツイです。

お店の中は逆に寒いくらいです。

お店のスタッフ全員防寒着来てます…。

店内にあった温度計に目をやると… - 2 。

馬鹿だよ！いくら外が暑いからって店内を氷点下にするなんて聞いた事が無いよ！

しかも、お客さん歯をガタガタ言わせながらクーラーとか見てるし。

「こ…これは、い…いくらなん…ですか？」

「こちらの商品は自動清掃機能が付いておりますので、8万円で
すね」

スタッフはにこやかに営業スマイルを振舞っているけど、スタッフは防寒着着用。

客は半袖にハーフパンツ、サンダルという格好だ。

どの国に行ってもこんなアンバランスな接客の様子は無いよな…。

俺らはというと、淡い暖色系のオーラに包まれていくらか寒さを凌げている。

これがソフィアの魔法の力だそうだ。

大学の時といい、なんか凄い違和感と好奇心が沸いてくる。それよりも、周りの反応が気になったけど、ソフィア曰く、

「外側からは普通にしか見えないうですよ」らしい。

「孝宏さん……。寒いですう……」

「ガマンだガマン。お前もうまいご飯が食いたいだろ」

「食べたいですけど……。うう……」

こりやソフィアの方が先に参ってしまいそうだな。

ちやつちやと炊飯器を買って帰るか。

数分後、俺らはある事に気付いた。

実はここ……。クーラー専門店だった！

地上5階あるスペースが全部クーラーもしくは扇風機しか置いてなかった。

骨折り損じゃん。

クレイジー店から戻った俺たちは街頭でもらった団扇をパタパタ仰ぎながら

日本一萎える街『肋原』（通称：アバラ）を散策した。

とある兎耳ナースのコスプレをした……。お爺ちゃん。

メイド服を着た……。お婆ちゃん。

ゴスロリな格好をした……。今にもはちきれそうな女性。

路上では街頭プロレスが行われ、そのリングの周りには血溜まりが
できている。

……。普通に見てて怖いよ。

しかも、この街頭プロレスにソフィアも出ると言い出したからもう
大変！

「私もこれにでたいですう……！」

「いや……。普通に無理だろ……」

「こんなキモい場所に連れて来られてフラストレーション溜まりまくりです！」

フラストレーションってあーた…。

俺の制止を振り切ってリングに上がるソフィア。

その第一声が、

「ヨロシクお願いしまゝす てへっ」

なんて言ったもんだから回りの男どもは狂喜乱舞。

中にはウェーブまでしてくる連中まで出てきた。

それにしても、猫被るとこんなにも可愛くなるなんて…。

…はっ！

俺は今何を考えていたんだ！

「お、男のリングに女が上がってくるんじゃないやねえ！！」

対戦相手（？）は酷くご立腹のようで…。

ソフィアはそんな事お構いなしで男どもに愛嬌たっぷり笑顔を振り撒いていた。

あ、プロレスラーの肩がプルプル震えてる。

「チエストオオオオ！！」

え！？この人鹿児島生まれ！？

何て考えているとレスラーは後ろのロープをバネの様に使いソフィアに突進してくる！

まずい！あいつはまだ男どもに手を振っている最中だ！

「ソフィア！危ない！」

そう言いきる前にソフィアはタンツ！と後ろへ飛んだ。

背後を取られたレスラーは強張った表情だ。

何があつたの？

リングの真横へ場所を変える。

そこには…。

「そんな攻撃が我輩に通用すると思つたか。若造が！身動き一つでもすればこの《アンソニー》で蜂の巣にするぞ」

レスラーにガトリングを突きつけているソフィアがいました。

つちゅうか、プロレスに銃器は反則だろ！

それに、そのガトリングって名前あつたの！？

死の宣告を受けたレスラーはその場に立つたまま失神して失禁して
いた。

「はあゝ、少しスッキリしました」

だろうね…。

あそこまですれば気分もスッキリするだろうさ…。

「そのガトリングってアンソニーって言うんだな」

「はいっ！知り合つて間もないですけど、私の一番信頼できる相棒です ね、アンソニー」

そう言うアンソニーに頬擦りをする。

『…少しくすぐつたいのだが…』

…今の声誰？

何かドラゴン　ールの　ルみたいな声したような気が…。

「何言ってるんですか！私とあなたの仲でしょう？。いいじゃないですか、これくらい」

『恥しいのだが…』

「…お前、さつきから何独り言言ってるんだ？」

声の出所が分からない…。

こいつどっからこんな声出してるんだ？

「え？一人じゃないですけど？」

と言われる。

俺とソフィアの他に誰がいる？

「アンソニー、ご挨拶しなさい」

『平山孝宏殿。お初にお目にかかる。我はアンソニー。我が主の使い魔也』

ガトリングが喋ったああああ！

……って、何となく予想は付いたさ。

でも、あまりにもベタなので口に出すのは即却下したけど。

「所で、さつき《私の一番信頼できる相棒》って言ったよな？じやあ俺は？」

ちよつと気になったので聴いてみる。

「んゝ…。下僕の中では一番信用しますよ？」

…俺はガトリング以下なのですか？ソフィアさん…。

そして今日からまた新たな居候が増えました…。

誰か主役変わってくんない？

もう疲れたよ…。パ（以下自主規制）。

ガタンゴトン…。

夕暮れ時の電車。結構風情があります。

夕日が窓から差し込み、電車の照明なんていらなくらい車内は明るく、静かです。

はあ…。何か黄昏たい気分になってきちゃう。

俺たちは今、アバラから家に帰る途中です。

ソフィアは俺の肩に寄りかかってお休み中。

新たに居候になったアンソニーは無口なところから、機能を停止しているのだろう。

ふと横目でソフィアを見る。

くうくうと寝息を立てていた。

こうしていれば可愛いものになあ…。

シャンプーの匂いもまた…。

…俺は変質者か！

帰って、夕食の買出しに行つて、それから…。

そんな事を考えている内に俺の意識は睡魔に誘われ、深い闇へと落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540a/>

空からの贈り物

2010年10月9日20時15分発行